

生徒の可能性を  
開花させる

## 教育課程の柔軟化

— 何ができるのか？ どう実現するのか？ —

小・中学校ではどの学校においても、多様な個性や特性を有する児童・生徒が在籍している実態が顕在化していると言われています。それは高校においても例外ではなく、学校によっては既に小・中学校と同様の多様性が生じていると伺います。また、公立高校が0校または1校の自治体が63.9%に上る中（\*1）、今後さらに統廃合が進むと、多様な生徒から成る公立高校は一層増加するとも言われています。そうした状況を踏まえ、中央教育審議会で検討が進んでいる学習指導要領の改訂論議を貫く3つの方向性の1つとして、“多様性の包摂”が「論点整理」（\*2）において示されました。その方向性の下で現在、多様な生徒に応じた教育課程を各校が柔軟に編成できるようにする仕組みについて、具体化に向けた議論が総則・評価特別部会や各ワーキンググループで行われています。

「論点整理」では“多様性の包摂”について、生徒の多様性に向き合い、それを個人及び社会の力に変える観点から、「（生徒）一人ひとりの意欲が高まり、可能性が開花し、個性が輝く教育の実現を目指すもの」と述べられています。では、どのように教育課程を柔軟化することが生徒の可能性の開花に資するのでしょうか。そして、その柔軟化はどのようにすれば実現することができるのでしょうか。今号はその問いについて、先行事例を交えながら考えてまいります。

VIEWnext 編集部 統括責任者 柏木 崇

## P.4 課題整理

生徒の学び方、教師の働き方を変え、  
多様な生徒一人ひとりの可能性を開花させる  
中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会 総則・評価特別部会 専門委員  
神奈川県・私立横浜創英中学・高校 校長 本間朋弘

## P.10 事例1 群馬県立沼田高校

多彩な選択科目や「マイタイム」の導入で、  
自律的な学びと多様な進路実現を支える

## P.13 事例2 滋賀県立彦根東高校

グローバル人材の育成を目指し、科目の融合・  
再編や先取り学習、探究学習の拡充を実現

## P.16 事例3 大阪府教育センター附属高校

自由度の高い科目選択や5段階評価を行う  
探究学習で、自ら学びを深める生徒を育む

P.19 事例4 大分県立安心院<sup>あじむ</sup>高校

複数のコース・類型と、小・中学校と連携した  
探究学習により、多様な生徒のニーズに応える

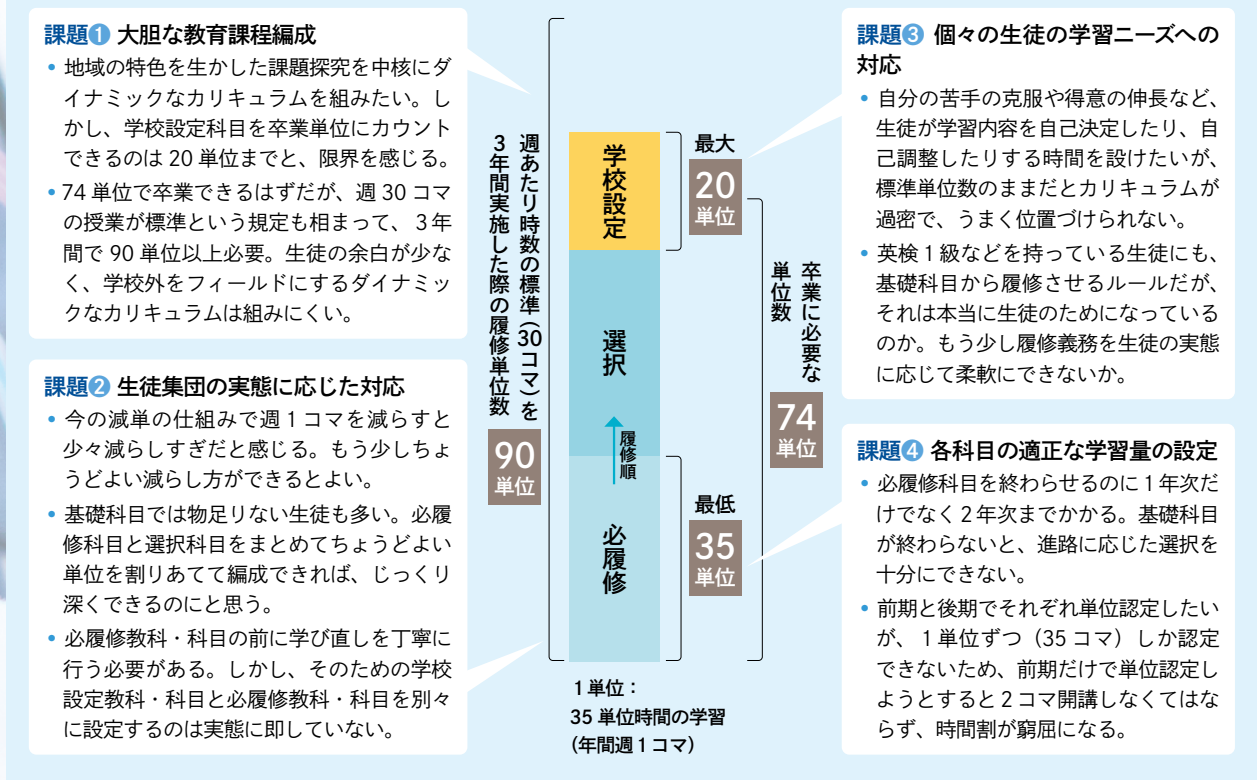
## P.22 本特集を振り返って

次期学習指導要領へ向けて、今から始められる検討のステップ

\*1 文部科学省「学校基本調査」2024年5月1日時点。 \*2 中央教育審議会 教育課程企画特別部会「論点整理」（2025年9月）。

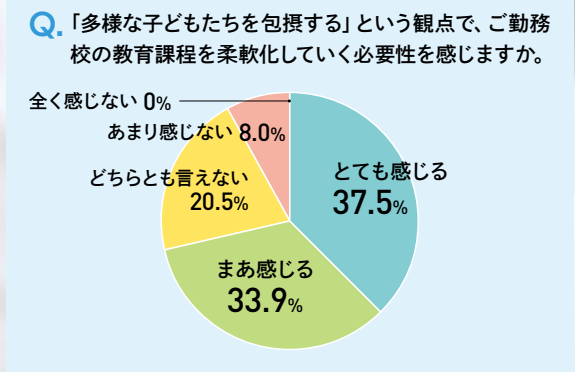
© すとらいぶ / PIXTA (ピクスタ)

図1 高校の教育課程の柔軟性をめぐる諸課題



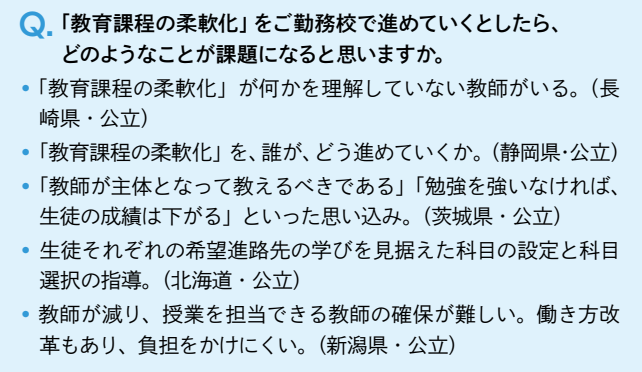
※中央教育審議会 教育課程企画特別部会「論点整理」(2025年9月)を基に編集部で作成。

図2 教師が感じる「教育課程の柔軟化」の必要性



※図2・3ともに、『VIEW next』高校版 読者モニターアンケート結果より(アンケートは2025年12月にウェブで実施。有効回答数は112)。図2は、単位以下を四捨五入等により、合計が100%にならない。

図3 「教育課程の柔軟化」の推進にあたっての課題



「論点整理」では、高校の教育課程の柔軟性をめぐる諸課題を図1のように整理している。本誌の読者モニターからも、「難関大学進学から就職まで、多様な希望進路の生徒が在籍している」「生徒が学びを自己調整する時間が取りにくい」「個々の生徒の学力と特性に応じて、教科・科目を自由に選択できる仕組みをつくりたい」といった声が寄せられており、教育課程の柔軟化の必要性

を感じている教師は7割を超えた(図2)。ただ、教育課程の柔軟な編成にあたっては、その進め方や教師にかかる負担などについての不安や懸念の声も聞こえる(図3)。

そこで今号では、学習指導要領の改訂の議論において、教育課程の柔軟化に関して検討されている仕組みを整理した上で、各校が柔軟化にどのように取り組んでいけばよいのかを、有識者の話や事例を通じて考えていく。

先生方とともに考えたい「問い」 「教育課程の柔軟化」で何ができるようになるのか。各校は柔軟化をどのように進めればよいのか。